

撮る人
"toruhito"
吉本和樹 個展
Yoshimoto Kazuki solo exhibition



二〇一五年
十一月二十四日(火)〜十二月六日(日)
十一時〜十九時
月曜日(休廊) 金曜日(二〇時まで) 最終日(十八時まで)

撮る人
"toruhito"
吉本和樹 個展
Yoshimoto Kazuki solo exhibition

Gallery PARC[グランマーブル ギャラリー・パルク]では、2015年11月24日(火)から12月6日(日)まで、吉本和樹による個展「撮る人 "toruhito"」を開催いたします。

2005年に日本写真映像専門学校を卒業、2007年に京都造形芸術大学情報デザイン学科を卒業、2012年に情報科学芸術大学院大学(IAMAS)を修了した吉本和樹(よしもと・かずき/1984年・広島県生まれ)は、写真をおもな表現媒体として、これまでに広島をモチーフに撮影をおこないながら、ヒロシマという場所に対して人々が抱くイメージや、その場所が持つ機能や力、そこに向けられるまなざしをテーマに制作活動を行っています。吉本の初個展となる本展は、2011年より取り組んでいる、原爆ドームに対してカメラを向ける人々の後ろ姿を撮影したシリーズ《撮る人 A-bomb Dome》により構成します。

1945年に原子爆弾が投下された際、爆心地に残った産業奨励館という建築は、その残ったドーム状の鉄枠から「原爆ドーム」と呼ばれるものとなりました。その後、丹下健三の設計により1955年に設置された広島平和記念公園は、この原爆ドームを北の起点として南に原爆死没者慰霊碑、広島平和記念資料館が一直線に配されたもので、原爆ドームはいわばヒロシマのシンボルとして位置づけられたといえます。そして現在、広島市だけでも年間1165万人、うち海外から65万人以上の旅行者がこの地を訪れ、そのほとんどがこのドームを目にし、そこにカメラを向けているといえます。

広島に生まれた吉本にとって「路面電車を降り、横断歩道を渡り、原爆ドームにたどり着く、そして写真を撮る。撮影する場所も、みんなだいたい同じ場所で撮影する」という光景はとても見慣れたものでした。しかし、ある時に「この一連の流れがオートメーション化されたもののように見えた」吉本は、その延々と繰り返される画一性に違和感を覚え、ドームと撮影者をひとつのファインダーに納めた写真を撮影したといいます。そして、撮影した写真を見返すうちに、次第にそこに写る撮影者の性別、国籍、年齢、体格、服装、服の皺、髪の毛の色、持ち物、カメラの構え方など、当たり前「多様な違い」に純粋な興味を抱き、後日に「原爆ドームを撮影している人の背後に気づかれないようにそっと近づき、後ろ姿のみを撮影してみた。」と言います。ここで『原爆ドーム』を撮る人への興味に端を発した吉本の撮影は、「原爆ドームを『撮る人』」へと被写体を移し《撮る人 A-bomb Dome》のシリーズ制作は始まりました。

これまでのおよそ70年に渡り、広島は「ヒロシマ」、産業奨励館は「原爆ドーム」と呼ばれ、それはこの地を訪れる様々な人々と歴史的なコンテクストを共有する際のシンボルとして今も強力に機能しているといえます。しかし、その力があまりに強力すぎるが故に、ヒロシマやドームは私たちの目と思考を瞬時に引きつけ、私たちの、目の前のものをよく見る、目の前のものから思考する態度を瞬間的(あるいは永続的)に停止させてしまう要素をも併せ持つのかも知れません。

吉本は、ここには言葉で形容しがたい独特な雰囲気があり、それは広島という街の隅々まで充満し、あるいはそれらについて考えた時にさえその雰囲気を感じると言います。そして、その雰囲気の中にはシンボルとして配置された原爆ドームがあると考えています。本シリーズの制作を通じて吉本は、この原爆ドームの周辺にあるモノや人を観察することで、その霞のような雰囲気に目を凝らし、その考察を試みるものです。



撮る人
"toruhito"

吉本和樹 個展

Yoshimoto Kazuki solo exhibition

二〇一五年

十一月二十四日(火)〜十二月六日(日)

十一時〜十九時

月曜日(休廊) 金曜日(二〇時まで) 最終日(十八時まで)



本展の周知・広報にご協力頂ける際に、広報用画像をご用意しております。本リリース掲載画像からご希望の画像番号および掲載媒体情報を明記の上、【info@galleryparc.com】迄ご連絡ください。尚、個人の鑑賞および利用を目的とする場合は、画像の貸出しはお断りしておりますのでご了承ください。

展覧会名 撮る人"toruhito" 吉本和樹 個展
出展作家 吉本 和樹 Yoshimoto Kazuki
会期 2015年11月24日[火] — 12月6日[日] 11:00~19:00 *月曜日休廊・金曜日20:00まで・最終日18:00まで
料金 無料
内容 原爆ドームを撮影する人を被写体とした写真およそ15点による展示。
会場 Gallery PARC[グランマーブル ギャラリー・パルク] 〒604-8082 京都市中京区三条通御幸町弁慶石町48 三条ありもとビル
アクセス 阪急河原町駅・三条京阪駅より徒歩10分、地下鉄東西線京都市役所前駅より徒歩3分。三条通・御幸町通の交差点北西角 [グランマーブル] 店舗内2階
問い合わせ **Gallery PARC (正木・永尾)** 〒604-8082 京都市中京区三条通御幸町弁慶石町48 三条ありもとビル [グランマーブル] 2F
【Tel&Fax】 075-231-0706 【Mail】 info@galleryparc.com

【広報画像03】

《撮る人 A-bomb Dome》

©yoshimoto kazuki

撮る人と私

私は原爆ドームにむけてシャッターをきる人々の姿に対して、最初は特に気にもとめていなかった。それは見慣れた光景だった。

様々なモニュメントが点在する平和公園のなかでも原爆ドームは最も有名であり、爆発によって破壊された姿は初めてそこを訪れた人にとって、思わずシャッターをきりたくなるほどのインパクトがあると思う。

しかし、多くの人々が鞆からカメラや携帯電話を取り出し撮影するその様子を、少し距離をおいて一定時間眺めていると、少しずつ異なる光景に思えてきた。

路面電車を降り、横断歩道を渡り、原爆ドームにたどり着く、そして写真を撮る。撮影する場所も、みんなだいたい同じ場所で撮影する。

この一連の流れがオートメーション化されたもののように見え、私はその様子を何枚か撮影した。当初はその一連の流れのほうに興味を持ち、原爆ドームもファインダーの中に入れて、「原爆ドームをとっている人」の情景として捉えていたが、撮影した写真を見直しているうちに、撮影している人の姿(性別、国籍、年齢、体格、服装、服の皺、髪の毛の色、持ち物、カメラの構え方、など)のほうに気がなり始めた。

そこで後日、原爆ドームを撮影している人の背後に気づかれないようにそっと近づき、後ろ姿のみを撮影してみた。

「これだ」と思った。

吉本和樹

Kazuki Yoshimoto

写真を表現媒体とし、主に広島(ヒロシマ)をモチーフに撮影をおこなう。

広島(ヒロシマ)という場所に対して人々が抱くイメージや、その場所が持つ機能や力、そこに向けられるまなざしをテーマに制作活動を行っている。

1984 広島県生まれ

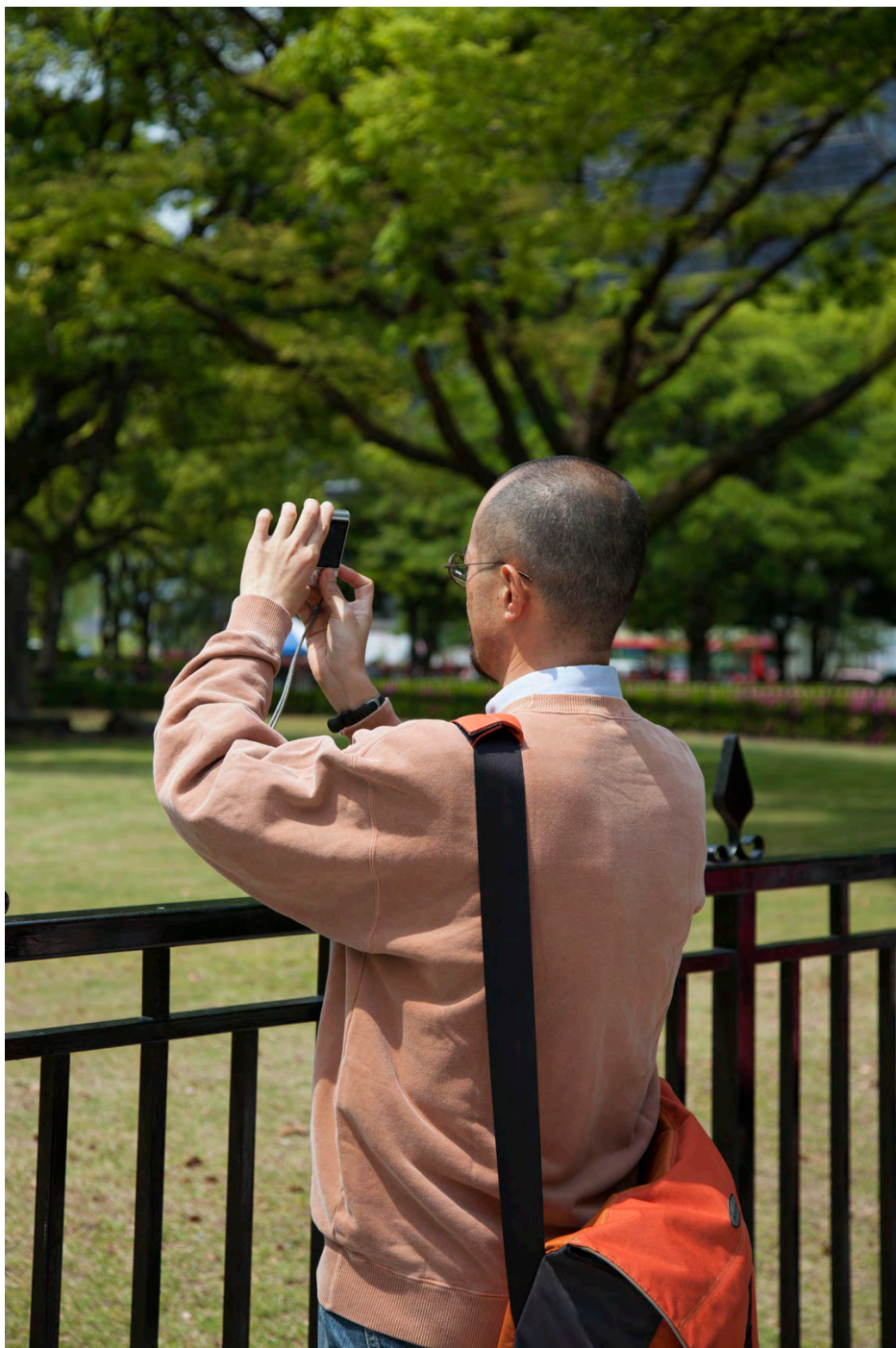
2005 日本写真映像専門学校 卒業

2007 京都造形芸術大学情報デザイン学科 卒業

2012 情報科学芸術大学院大学(IAMAS) 修了

2015

グループ展「視点の先、視点の場所」@京都造形芸術大学 ギャラリーオーブ





【広報画像05】

《architecture / Hiroshima Peace Memorial Museum》

900×2200mm inkjet print 2015

©yoshimoto kazuki



【広報画像06】

《monument (left side)》

1000×1300mm inkjet print 2015

©yoshimoto kazuki



【広報画像07】

《monument (right side)》

1000×1300mm inkjet print 2015

©yoshimoto kazuki



【広報画像08】

《objects / Hiroshima Peace Memorial Park》

各970×1270mm inkjet print 2015

©yoshimoto kazuki